

## 令和4年度 第4回神戸市就学・教育支援委員会

### 議事要旨

- 1 開催日時 令和5年2月16日(木) 15時~17時
- 2 開催場所 神戸市総合教育センター701号室
- 3 出席委員 石倉委員長、中尾委員、小林委員、上原委員、高田委員、中西委員(オンライン)、河崎委員、関口委員、西田委員、二宮委員  
オブザーバー 榎本副課長、山田校長、三瀬校長(オンライン)、辻園長
- 4 議事 「特別支援教育に関するあり方について 今年度のまとめ」  
(事務局より資料1ついて説明)

#### ●委員長

- ・今年度の「特別支援教育のあり方 今年度のまとめ」について事務局からの説明を踏まえ、ご意見をいただきたい。

#### 【視覚障害教育】

##### ●委員

- ・10年前に比べると、視覚障害の児童生徒数が半減しているが、今後の見込みはどうか。
- ・教員の専門性を高めることや、視覚障害の特別支援学級や通級教室の設置についてどのように考えているか。

##### ○事務局

- ・視覚障害の児童生徒数について、今後の推移は横ばい、もしくは減少傾向と推測している。他県の特別支援学校では、生徒児童数は1桁台であると聞いている。このような現状を踏まえると、学校教育において集団での学びが課題であると認識している。
- ・現在盲学校のひとみ教室が通級指導や巡回指導を行っているが、教員に対する指導支援もさらに進めていきたい。

#### 【聴覚障害教育】

##### ●委員

- ・聴覚障害のある幼児で、保育所へ通っている場合、4日間は保育所へ行き、1日だけ訓練に来るケースが多い。障害のない子供たちと一緒にいることが大きな成長になっている。難聴の子供と障害のない子供たちが一緒にいることができる取り組みを進めていただきたい。
- ・難聴の子供たちのうち半数以上が、難聴だけではなく、複数の障害を持っている。知的障害や肢体不自由と合併している場合、それらの支援が中心になり、聴覚に関してのサポートや理解が十分でない。複数の障害を持つ聴覚障害の子供への支援もお願いしたい。

○事務局

- ・実際に知的障害部門に人口内耳や補聴器を装着した子供も在籍している。現在は県立聴覚特別支援学校の地域支援担当の方に、定期的に巡回していただく体制をとっており、今後そのような取り組みを進めていきたいと思っている。

●委員

- ・通級教室の教員への教育や研修は必要だと感じていたため、とてもありがたい。
- ・進行性難聴は中学生以降に病状が現れ、ケアが必要になる子供もいる。県立聴覚特別支援学校との連携に加えて、中学校以降の通級教室について、今後どうしていくかも考える必要がある。
- ・難聴学級に在籍する児童の通学支援について、ありがたい支援策だと思う。通学ボランティアとは具体的にどのような内容なのか。

○事務局

- ・通学ボランティアについて、入学したばかりの児童の場合、公共交通機関を使って自力で安定した登校をすることは難しいと思われる。そのような場合にボランティアが通学をサポートしていくという制度である。
- ・難聴の子供へのサポートについて、本委員会や、関係機関からも、思春期以降の支援の重要性についてご意見をいただいている。今後さらに県立聴覚特別支援学校と連携を強化していくことに加え、中学校に言語難聴の通級教室を設置することも検討している。

●委員

- ・中学校は1クラスの人数が増えることや、英語の授業が始まることなど、難聴の子供が困る場面が想定されるため、ぜひ対応をお願いしたい。

○事務局

- ・以前に本委員会で、難聴の児童は教室の中で静かに悩んでいると、ご意見をいただいた。早急に取り組むを行う。

●委員

- ・聴覚障害について、思春期以降に支援を受け始めると、なかなか自身のことを受け入れられない子供が多く、幼い頃から自己受容していく必要があると感じている。
- ・通常学級に在籍している子供は、学校内での孤立や、自分とどのように向き合えばよいのかとの悩みを抱えている。成人してからも、自分自身のことが受け入れることができず、解決できない人もいる。
- ・自己受容して理解していくためには、同じような障害を持つ子供や先輩とつながりを持ち、コミュニケーションをとることが必要だと思う。そのために、各学校で子供たち同士をつながりや仲間関係を築けるように支援していくことも、これから必要になっていくのではないかと思う。

●委員

- ・障害ごとに入口が分かれていると、複数の障害のある子供は、誰がどこで対応するのか明

確でないことがある。例えば難聴と ADHD を持つ子供がどの学級を選ぶべきかなど、判断が難しいことがあり、そのような子供たちへの対応が課題であると思う。

- ・軽度の聴覚障害や発達障害の子供たちが見過ごされてしまい、後から辛くなることについて、我々がどのように汲み取っていくかなど今後細やかな研修が必要となると思う。

### 【訪問教育・その他】

#### ●委員長

- ・以前、特別支援学校の訪問学級を訪れた際、一定期間入院している子供たちが復学する際に、ICT を活用すると原籍校への復学がスムーズになると聞いた。入院している子供たちのためにも、小学校・中学校で ICT の活用を進めてもらうことはとてもよいのではないかと話があった。
- ・事務局へ質問であるが、神戸市の小中学校において、ICT はどのくらい進んでいるのか。

#### ○事務局

- ・神戸市の小中学校でも ICT の活用は進めていて、今後さらに進めていきたいと思っている。
- ・神戸市は、1 ヶ月間以上入院する児童は、病弱学級などへ転籍して、しっかりとした教育を受けられるようにしている。入院が 1 ヶ月に満たない場合は籍を変えずに、その子供ができる教育内容を考えて進めている。

#### ●委員長

- ・他でも ICT の活用が効果的であるという考察もあるため、神戸市でもぜひ推進してほしい。

#### ●委員

- ・ICT の活用について、学校によって差がある。子供たちにどのように使いたいのか聞き取りながら、うまく ICT を活用すると子供も教育者もお互いに世界が広がるのではないかなと思う。

#### ●委員

- ・学会などで教育機関と医療機関の連携不足であると指摘があり、医療機関では教育機関と情報共有をしようという動きがある。そのなかで、子供の病状などを連絡カードやデータで共有できるようなツールが充実していくとよいのではないかなと思っている。

#### ●委員

- ・インクルーシブ教育や繋がる支援が重要といわれているが、本委員会のようなことがまさに繋がる支援であることを感じている。
- ・複数の障害を持つ子供は、どちらかの障害に対する支援だけでなく、総合的に支援をしていくことが必要だと思う。
- ・医療従事者や教育に携わる人をはじめ、子供たちを支える人全員が、広い視野をもって互いに関わり合っていくことで、繋がる支援やインクルーシブ教育の実現につながると思う。

う。

- ・医療的ケア児に関して、特別支援学校ではなく、地域校を選択する人が増えてきているが、その理由の一つとして、保育園での医療的ケアが受けられるようになってきたことにある。
- ・各機関での取り組みは、互いに連動して大きな関係性を持っているため、それぞれが同じ方向性で支援していかないといけない。

#### ●委員

- ・肢体不自由児であれば施設に1人、あるいは数人程度で、障害のある子供は決して多い状況ではないと思うが、特別支援教育に携わる教員はどのようにしてスペシャリティを保ち、さらには磨いているのか。

#### ○事務局

- ・非常に難しく、重要なことだと認識している。特別支援教育に関心があり、頑張りたいと思っている教員に対して、次年度から一人ひとりのキャリアデザインをしっかりと組み立てていこうと計画している。
- ・研修や実践を踏まえながら専門性を高めていけるような仕組みを考えている。
- ・特に聴覚障害や視覚障害の分野においては、教員数が非常に少ない。今後も教育委員会以外の機関と連携していくことや、外部の研修などで専門性をさらに磨いていけるよう取り組んでいきたい。

#### ●委員長

- ・今年度の委員会で議論した内容が、少しずつ次に繋がっていることが素晴らしいと思う。
- ・特に視覚障害・聴覚障害に関する内容の議論が多く、これらの取り組みがさらに進むことを期待している。